

アップサイクルで環境問題に挑戦する

地球の隅々まで到達している
環境破壊

人間は自分が何者であるかを追求し、自身にさまざまな名称を付与してきた。スウェーデンの博物学者C・リンネは人間の学名として「ホモ・サピエンス（英知ある生物）」を提唱、フランスの宗教学者H・ベルクソンは「ホモ・ファールベル（工作する生物）」、オランダの歴史学者J・ホイジンガは「ホモ・ルーデンス（遊戯する生物）」、ルーマニアの宗教学者M・エリアーデは「ホモ・レリギオースス（信仰する生物）」などと人間を定義している。

これらの高尚な学名とは次元が相違するが、人間を「ゴミを産出する生物」と定義し、その視点から世界が直面している問題を検討してみ

る。人間以外の生物は自然の洞窟を巣穴としたり、自然の素材で簡単な住処を構築したりするが、それらは使用されなくなれば自然に還元されていた。しかし各地の古代遺跡が証明するように、人間は生活するために強固な人工環境を建造し、それらを使用しなくなると各地に廃墟を発生させてきた。

ローマの都心にモンテ・テスタッチョという場所がある。古代ローマ時代のオリブオイルの輸送容器アンフォラの廃棄場所で、四〇〇年近く利用された結果、高さ三六メートルの小山に成長した。同様の光景は現代も存在する。アフリカのガーナの首都アクラの付近にアグボグブロシーという廃棄物処理場がある。ここは別称「電子ゴミの墓場」という世界最大の電子機器廃棄物処理場

で、世界各地から廃棄機器が輸送されてくる。

さらなる衝撃の事態も進行している。南太平洋のピトケアン諸島の一島に世界自然遺産にも登録されているヘンダーソン島という絶海の孤島がある。その浜辺には海流の関係で大量のゴミが漂着しており、大半はプラスチックのゴミである。遠方から撮影された写真では白砂青松の浜辺であるが、接近してみるとプラスチックゴミが一面に散乱し、世界自然遺産とは想像できない驚愕の光景に変貌している。

新規の環境対策 アップサイクル

このような問題は世界各地で発生しているので対策が検討されはじめているが、これまでは廃物を資源に

変換して利用するリサイクルが主流であった。しかし、素材として再生する過程で材質が次第に劣化し、価値が低下していく従来のリサイクルはダウンサイクルとも命名されている。そこで登場してきた活動が、単純に資源を循環させるだけではなく、以前よりも価値を向上させるアップサイクルという概念である。

この概念が社会に登場したのは一九九四年のことで、ドイツで企業を経営するR・ピルツが従来のリサイクル活動は経済価値と使用価値を低下させるダウンサイクルであり、価値を向上させるアップサイクルが必要だと提言したことが発端とされる。さらに二〇一三年に建築設計を専門とするW・マクダナーと環境化学が専門のM・ブラウンガートが廃物処理の原理を明確にした結果、アップサイクルが社会に浸透するようになった。

アップサイクルはヨーロッパを起点とした活動であるが、二〇一九年になってアメリカで食品廃棄を減少させることを主要な目標とするアッ

プサイクル食品協会が設立され、バナナやパイナップルを世界規模で販売しているドール・フードや食品脱水装置のエンウェーブなどが参加し、大量消費の象徴であった大手企業ですら、この潮流に対応したことで、運動の勢力が急速に拡大しつつある。

アップサイクルを 推進すべき日本

ここまで紹介してきた歴史には日本が登場しないようであるが、日本社会にはアップサイクルの伝統が根付いている。陶器や磁器の茶碗が破損すると、日本では廃棄するのではなく金継ぎという技法で破片を接着して修復する伝統がある。一例として一五世紀に金継ぎによって補修された茶碗「青磁茶碗（馬蝗絆）龍泉窯」は重要文化財となっているし、本阿弥光悦作の「赤楽茶碗・雪峯」は戦乱で破損したが修復され価値が向上した。

こうした日本の修復文化が欧米に伝播し、金継ぎは伝統工芸の修復技

術の領域から発展して「自己修復の象徴」として使用される言葉になり、二〇一八年にはニューヨークで作家として活躍するC・クマイの著書『キンツギ・ウエルネス（金継ぎの満足）』が話題になった。このような潮流はヨーロッパにも波及し、ロンドンでは画廊が「金継ぎ月間」を開催して、日本の伝統技能以上の精神文化の象徴として理解されるようになっていく。

これらの事例が象徴するように、日本の伝統文化の背後には環境を維持する精神が存在するが、残念ながら現在の日本は「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成順位は世界一位、地球温暖化対策評価は五位と低迷している。これを克服するために社会に蓄積されてきた精神文化こそが強力な武器となるはずである。日本は世界規模の環境の変化を敏感に察知し、伝統文化を有用な解決手段へ昇華させる重要な局面にある。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。